

## 地域交通 観光客、高齢者目線で

今春は各地で、観測史上最速で桜が開花した。専門家の見解では、冬の寒さとの気温差が早期の開花に影響しているとか。咲き誇る桜とともに、急速に増加した観光需要も、コロナ禍という厳しい冬の時代があったからこそ、今後、大いに盛り上がることを期待したい。

3月最終週の東京では、駅の窓口、美術館の入場口など至る所でインバウンド（訪日外国人客）が列をなし、コロナ前の賑わい（にぎわい）が日本に確実に戻りつつあるのを実感した。少し油断していると、ぶつかりそうになる。スーツケースを転がしながら、不慣れな様子で街案内の掲示板を確かめる観光客には周囲に気をつけるゆとりはない。北陸でも目立つようになったインバウンドは、タイムラグを伴いながら、さらに大きな流れとなって押し寄せてくるだろう。

「単身赴任で暮らしているなら、車を買ったらどうですか」「そのうちにね——」

行きつけの料理店のマスターと幾度かこんなやりとりをしている。煮え切らない答えの理由は、任地で事故を起こさないようにという思いのほかに、鉄道・バス・徒歩で各地を旅する楽しさも大きい。路線バスは旧市街を走る。バイパス経由のマイカー移動と比べて、歴史を感じる街並みと出会える。また、公共交通機関を利用することで、遠方から来た観光客や、移動手段を持たない高齢者の目線で街を観察しようと試みているからでもある。

県庁所在地以外の都市を観光する際に、主要駅からバスに乗車した印象では、平日休日問わず、乗り合わせるのは数名の高齢者である。マイカー社会の中で、地元住民にとって、バスは運行頻度や、自宅と停留所の距離の課題はあると思うが、運行時刻は比較的正確だ。路線によってはフリーの乗降車区間があるなど、工夫も凝らされているので、そうしたメリットを見直しても良いのではないかと常々思う。

ただ、観光客にとっては、路線と料金の分かりにくさが利用のハードルを高くしている。停留所で目的地に見合った運行系統を見分け、整理券をとり、刻々と運賃が変化する方法に、観光客はすぐには馴染めない。観光客にとっては、料金は割高でも、スムーズに乗り降りできる北陸地域で広く利用可能なバスの周遊券などがあれば、交通系のICカード利用ができなくても、ありがたい。駅によっては、周辺の名所マップがあつて便利なだけでなく、中には、複数のモデルコースを記載した案内も見受けられる。さらに、「午前10時台の出発であれば、何分発のバスに乗って、どの停留所で降りて——」といった情報もあれば、実用性は格段に増す。

今後、先進7か国（G7）教育相会合や国民文化祭、複数の経済団体の全国大会、新幹線延伸など、北陸が注目されるイベントが目白押しである。これを機に、観光の2次アクセス整備、高齢者の生活路線維持という観点から、身近な交通網に関心を高め、北陸内の好事例を共有するだけでなく、利用を通じて得られた知見を生かし、持続可能性を高める方向で地域社会の魅力に磨きをかけてはいかがだろうか。